

(5) 武蔵国の官衙・古代寺院と山王塚古墳

平野寛之（川越市立博物館）

1. 武蔵国の官衙

山王塚古墳と官衙の関連を考察するにあたり、大宝律令制定（701）に伴う国・郡・里制施行前のいわゆる評制段階において、武蔵国の事例としては榛澤評家（深谷市熊野遺跡）が一定の指標となる。初期の榛澤評家は7世紀第3四半期頃に成立し、大型の総柱掘立柱建物を中心的な建物とし、首長層による儀礼行為に使用されたと思われる瓢箪形の石組み井戸のほか、鍛冶工房などが検出されている。

山王塚古墳が位置する入間評では、入間川中流域左岸の入間台地東端部の川越市霞ヶ関遺跡とその隣接遺跡が評家の最有力比定地となっている。ここでは8世紀第1四半期以降（郡家段階）の掘立柱建物が官衙的なコ・ロ字型の配置で検出されている。これらに先行する7世紀後半の大型総柱掘立柱建物跡及び、平面瓢箪形の井戸など、榛澤評家の事例と規模・構造が類似した遺構を有することから、これらが入間評家段階の中心的な遺構と考えられている。出土遺物について注目すると、入間評家（郡家）では7世紀末～8世紀前葉にかけて東海産須恵器に次ぐ比率で上野産須恵器が一定量出土しており、当初から土器の産地組成において上野方面からの影響を強く受けていることがわかる。7世紀後半という時期は、折しも上野国の東山道本道から武蔵国府までを結ぶ駅路として東山道武蔵路が整備された段階である。武蔵国内の上野産須恵器は武蔵国北端域及び河川による搬入が想定される地域を除くと、入間評家と東の上遺跡（駅家と推定）の出土点数が突出しており（富田 2008）、入間評家の西約 1.5km を走る東山道武蔵路経由で搬入された可能性が指摘できよう。

2. 官衙と終末期古墳

次に官衙と終末期の古墳との関連に注目したい。榛澤評家の場合、立地する櫛引台地に地域最大規模の古墳が営まれる在地首長層の伝統的な勢力基盤があり、その後を継ぐように榛澤評家が整備されている。一方で入間評家が置かれた地域は入間川中流域左岸の入間台地東端部に的場古墳群が存在するものの、後に勝呂廃寺が造営される入間台地北端（坂戸台地）の古墳群をはじめ、入間郡とされる地域に複数の古墳群が散在し、郡域内に複数の豪族が割拠していた状況がうかがえる。山王塚古墳の属する南大塚古墳群は入間評家からは入間川とその広い沖積低地を挟んだ対岸約 3km の位置関係にあり、地理的には入間評家と山王塚古墳の間に直接的な連続性を確認することは困難であるといわざるをえない。つまり、山王塚古墳が入間地域における終末期古墳の中で突出した規模と墳形の特殊性を有するにもかかわらず、そのお膝元である入間川右岸の武蔵野台地に評家が置かれなかった。

7 世紀後半の入間地域は、山王塚古墳を擁する南大塚古墳群を含め、各地に古墳群を築いた勢力が割拠し、競合関係にあったと言える。入間評家の成立は、物流の要となる入間川に接し、新規開削された東山道武蔵路を至近に臨む、武蔵国中央部の交通結節点という地理的性格が重視され、各豪族の勢力範囲の緩衝地帯としてこの場所に評家が設置されたと考えられる（黒済 2008・平野 2008）。

3. 武蔵国の古代寺院

武蔵国での寺院造営は、7 世紀前半～中頃に寺谷廃寺（滑川町）から始まるものの、明確な寺院

遺構は未確認である。伽藍が確認された中では勝呂廃寺（坂戸市）が7世紀後半に建立されている。7世紀後半に成立したと考えられる武蔵国内の古代寺院としては、いずれも伽藍は未確認であるが、西別府廃寺（熊谷市／幡羅評）、馬騎の内廃寺（寄居町／榛澤評）、小用廃寺（鳩山町／入間評か）、影向寺廃寺（川崎市／橘樹評）、深大寺（白鳳仏が伝わる）等が挙げられる。これら初期寺院の瓦は、上野国の影響を強く受けて造られていると考えられている。評家近郊に位置する寺院が多い理由として、古墳時代の地域首長の流れを汲んだ各地域の評督等の階層によって造営された氏寺的な寺院であるため、結果として古墳・官衙・寺院が同一地域に確認されているものと思われる。

終末期の古墳との関係では、寺院の基壇を造る技術と、古墳墳丘築造に使用される版築技法及び石室下の掘込地業との共通性が注目される。これらは古墳築造に必須の技術ではないため、中国からもたらされた最先端の寺院築造技術を採用することに意味が見出されていたと考えられる。

4. 山王塚古墳と官衙・古代寺院の関係

山王塚古墳が築造された7世紀後半における武蔵国の主要な終末期古墳とともに、当該期の古代寺院と評の位置（評家の位置がある程度判明しているものについては、評家の位置）を落とし込んだものがⅢ-1-3図である。以下はⅢ-1-3図を元に述べたい。

7世紀後半の武蔵国では、これまでの河川流域に豪族首長が分布する古墳時代的な領域から、新たに開削された東山道武蔵路を南北の軸とし、河川と交わる陸上交通と水上交通の結節点に政治的な軸足が移りゆく傾向がみられる。南武蔵では多摩川と東山道武蔵路の交点に上円下方墳である武蔵府中熊野神社古墳が築造され、後に多磨評家や武蔵国府が整備される。北武蔵の入間川と東山道武蔵路の交点には入間評家が整備され、評家の対岸に山王塚古墳が築造される。天文台構内古墳は東山道武蔵路からやや離れるが、おおむね武蔵で上円下方墳と確定する古墳はいずれも陸上交通と水上交通の結節点を臨む位置に築造されている。また、掘込地業や版築技法といった寺院建築由来の技術を用いた古墳、そして古代寺院についても、東山道武蔵路の沿線に集中し、そこから外れる古墳や寺院も東山道武蔵路と結節する河川流域に所在する傾向がうかがえる。

上円下方墳を築造した首長は中国思想に由来する墳形の選択や版築・掘込地業等の最新の土木技術を導入しえた事実により、畿内中枢との直接的な強い繋がりが想定される。彼らは評家の設置や東山道武蔵路の開削といった広範な地域の首長たちとの調整が必要となる国家的な事業において、畿内中枢と在地の諸勢力との仲介役となり主導してきた存在と推定できるのではないだろうか。律令国家の成立に向けた動きの中で地域経営を主導する立場であるならば、墓域を含めた自身の勢力基盤を新たな官衙の候補地へ移転する、あるいは東山道武蔵路を臨む位置に上円下方墳を築造するのは、必然的な事象といえよう。同様に初期の古代寺院（氏寺）が同様の分布を示す背景にも、水陸の交通結節点を掌握し、地方官衙の官人へと再編されてゆく首長が氏寺として造営したことを示唆している。

山王塚古墳は入間評家から入間川を挟んだ対岸約3kmとやや離れた位置になるものの、前記のとおり各豪族の緩衝地帯かつ、入間川水運と東山道武蔵路の結節点に入間評家が置かれたとするならば、その築造者一族の本拠・墓域と評家が隔絶していたとしても、一概に関係性を薄くみなすことはできない。山王塚古墳の築造者は畿内中枢との密接な繋がりを有し、東山道武蔵路開削など律令国家の基盤整備に貢献しながらも、地域で突出した第一の勢力ではなかった。水系ごとに豪族首長が割拠する

入間地域において、競合する他の豪族首長へのアドバンテージを内外へ示す意味も込めて、上円下方墳という墳形を選択したものと思われる。おそらく、結果的には入間評の評督クラスの地位を務めることになったのではないだろうか。

参考文献

- 川越市教育委員会・川越市遺跡調査会 1997 『山王塚脇遺跡 第一次～第三次発掘調査報告書』川越市遺跡調査会報告書第20集
- 川越市教育委員会・川越市遺跡調査会 2013 『市内遺跡Ⅱ』川越市遺跡調査会調査報告書第44集
- 黒済和彦 2008 「古代入間郡における終末期古墳の様相と評・郡家の成立」『論叢 古代武蔵国入間郡家—多角的視点からの考察—』古代の入間を考える会
- 黒済和彦 2005 「埼玉県における前方後円墳以後と古墳の終末」『シンポジウム 前方後円墳以後と古墳の終末』第10回東北・関東前方後円墳研究会大会資料
- 黒済和彦 2016 「古墳時代終末期の武蔵—基礎的資料の提示—」古代武蔵国研究会 定例会レジュメ
- 埼玉県教育委員会 1976 『日本住宅公団（川越・鶴ヶ島地区）埋蔵文化財発掘調査報告 鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第8集
- （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985 『鶴ヶ丘（E区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第45集
- 富田和夫 2006 「北武蔵における他国産須恵器の流通とその実態—上野産須恵器を中心に—」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古別冊6 埼玉考古学会
- 富田和夫 2008 「霞ヶ関遺跡群出土の上野産須恵器をめぐって」『論叢 古代武蔵国入間郡家—多角的視点からの考察—』古代の入間を考える会
- 平野寛之 2008 「古代入間郡家の復元に向けて—川越市霞ヶ関遺跡群の再検討—」『論叢 古代武蔵国入間郡家—多角的視点からの考察—』古代の入間を考える会
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2005 『武蔵府中熊野神社古墳』府中市埋蔵文化財発掘調査報告 第37集
- 三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会 2011 『天文台構内古墳Ⅰ 東京都三鷹市大沢 天文台構内古墳再確認調査報告書』三鷹市埋蔵文化財調査報告 第33集

